

◆実践問題38◆

〔藤原道長の娘である東宮妃藤原僖子が亡くなり、火葬する場面に続く一節である。〕

かかる程に、船岡の南の方に、火こそほのめき

てただならずあはれなる事ぞ見ゆる。人々見やり

て、「あはれ、かれ見よや、はやまたかくもありけ

るは」など、見やり騒ぐに、ある者の申すは、「督

の殿に、小左衛門とていみじううたきものにと

りわきおぼしたりしが、日ごろ、かれもわづらひ

てえ参らざりしに、このうせ給ふ日ぞ参りて見

奉りて、まかでにけるままに、同じ日やがてうせ

にけるが、折しもこそあれ、今宵しもこの辺り近

うするなりけり。人々いみじうあはれに見やる。

高き低きこよなき御有様にこそ、同じう言ふべか

- 1回目
- 2回目
- 3回目
- 4回目
- 5回目

らねど、事のさま煙にて上る程は見え分かぬわざ

になむありける。殿ばらなどのあはれがりのたま

はするを、殿の御前にほの聞こし召して、「あはれ、

とふべかりける事にこそありけれ。物などをやる

べかりけるものを。人よりもあはれと思したりし

かば、同じ所にや参らむと思し召すも悲しうて、

泣く泣く御覽ず。